

### 伝飛鳥井雅綱等筆『源氏物語』54冊



本学附属図書館には「特殊文庫」として別置される古典籍資料が存する。これらの貴重図書は、本学教授であった故正宗敦夫先生の蔵書と江戸後期の学者の一族である黒川春村・真頼・真道三代の蔵書とを核として形成され、歌書のコレクションとしては全国有数の規模を誇っている。その全容については『特殊文庫目録』が昭和50年に本学図書館から刊行され利用の便が図られているが、ここに紹介する資料は、同目録作成以降に本学に帰したもので目録未掲載の資料である（現在の函架番号はK-8-4）。

2007年は源氏物語千年紀の呼び声とともに『源氏物語』に関する話題の多い年であったが、本学図書館にも『源氏物語』関連の多くの古典籍が所蔵されている（『光源氏物語抄』（所謂、異本『紫明抄』）などは写真版が刊行されており研究資料としても著名）。標記の資料もその1つである。

伝飛鳥井雅綱等筆『源氏物語』は、54冊を揃える『源氏物語』の写本で、装丁は袋綴。全冊ともに紺地に金泥で簡略な絵を描く美しい表紙（縦25.7cm横20.0cm）を懸けるが、これは後の修補により添えられたもののようである。表紙の図様には『源氏物語』の巻々に関連する構図が選ばれており、若紫巻ならば張り出した縁と飛び去る雀というように巻を印象づける図様が多いが、桐壺巻の表紙は桐の葉と壺が描かれるなど、中には判じ絵のようなものも混ざる。本文の書写される料紙は楮紙、每半葉9行

程度でゆったりと書写されている。外題・内題は付されていない。

本書には奥書・識語等の書写時期や筆写者を伝える記載はないが、各冊の巻首の遊紙に紙片を貼り筆者名を記している。紙片には各巻の巻名とともに飛鳥井雅綱（1489-1571）、広橋守光（1471-1526）、今出川晴季（1539-1617）、〔猪苗代〕兼載（1452-1510）、専修寺堯真大僧正（1549-1619）の名が記されている。記載の通りの書写ならば室町期から江戸初期にかけて書き継がれた取り合せ、あるいは補写本となるが、もとよりこれらは覚えの書き付けであり書写者の確証はない。総体として室町末江戸初を大きくくぐることはないように思われるが、これらの伝承筆者の確実な真蹟資料との筆跡の比較が今後の検討課題となろう。

『源氏物語』には、青表紙本、河内本、別本と通称され識別されている本文の相違が知られているが、本書の伝える本文については詳細な調査はなされてはいない。これも今後の検討が期待される。また、本書には、全巻にわたり別筆と目される墨の句切点や濁点が記されており、本書が単なる美しい飾り本として用いられたのではなく、しっかりと読み込まれた形跡を今に伝えている。前近代の『源氏物語』の読み方を窺う上でも興味深い資料と言える。（文学部 准教授 海野圭介）